

『母への思いやり』

聖書 ヨハネによる福音書 19章 16～27節 讃美歌 11 440 289 463 24

説教 森田幸男牧師

ルカによる福音書は、イエス様が伝道に立たれたのは年およそ30歳の頃であったと記しております。30歳にして伝道を志すというのは、少し遅いのではないのでしょうか。

わたしの場合は、21歳の時に神様の召しの御言葉を聞いて、そして東京の神学校に行き、6年の準備期間を経て、27歳の時に伝道に立ちました。守り導かれて、この春で40年になります。人それぞれでありまして、僅か数年でその務めを果たす人がありますし、長い時間をかけて、自分に与えられた務めを全うする人もあります。

イエス様は年およそ30歳で伝道に立たれ、僅か数年、3年そこそこで今日見ますように十字架に架けられて命を落とされました。実に短い伝道の期間でありました。

この伝道に立たれるまでの30年の間、イエス様はどうしておられたのか。今、「貧しき村の大工として主は若き日過ごされた」と、ご一緒に讃美歌を歌いましたけれども、主は大工としてその30歳ぐらいまでの時を過ごされたのであります。やはり聖書によりますと、養父のヨセフは早く亡くなっているようであります。イエス様には兄弟がおられました。すぐ下の弟さんの名前はヤコブという名前でありまして、また妹さんもおられたということでもあります。

そのようなことでありまして、イエス様はご長男として、母マリアさんとは年の離れた兄弟と言ってもいいぐらい、十五、六才ぐらいしか違いませぬので、それぐらい年の離れた兄弟は珍しくはないわけですけれども、そのような母マリアと共に、マリアを助けて長男としての務めを、三十歳になるまで果たされたのだと思います。

勿論そういう大工としての仕事を捨てて、いわゆる公生涯、伝道の生涯に入られたのは三十歳ということでもありますけれども、その間の隠されたイエス様の30年、それは母マリアにとっても肉親の兄弟姉妹にとっても、そして親類の者にとっても、ナザレの村の人たちにとっても、このイエス様という存在は本当に慰め深いものであった。イエスと言う名前は旧約聖書に出てきます「ヨシュア」という名前がギリシャ語化したのが「イエス」でありまして、これは「神は救い」という意味であります。またイエス様の本質を踏まえて、イエス様のことを「インマヌエル」と呼んでいます。これはヘブライ語で、「神、我らと共にいます」という意味です。「インマヌエル・イエス」。イエス様に触れた人は、神様が共にいます、神様が私たちを助けてくださるのだということ、イエス様のその存在を通して本当に身近に感じたのではないのでしょうか。ですから公に伝道に立たれたのは三十歳を過ぎてからだとしても、イエス様のそれまでの歩みもまた、今申したような意味において生ける神の生ける証人として歩まれたと思います。

そしていよいよ公生涯に入られて、イエス様を慕い従う人が増えてまいりました時に、イエス様はこういうふうに言われました。「わたしよりも自分の父や母を愛する者は、わたしに相応しくない。」そういうことを繰り返し言われております。また、「自分の命を救お

うと思う者は、それを失う。しかし、わたしのため、福音のために命を失う者はそれを得る。」こういうふうにおっしゃいまして、これは従おうとする者たちをふるいにかけるような、厳しいお言葉ですけれど、これほど真実な言葉はありません。

父母を愛することと神を愛することは、これは結局のところ矛盾することではありませんけれども、時に、父母を愛することが、神に従うことを妨げることになる。そういうことは私たちも経験するところであります。

そしてイエス様は三十歳にして、母や兄弟姉妹や、また親類の者からも離れて、遠縁にあたる洗礼者ヨハネが捕らえられた後、イエス様は伝道に立たれる決断をされたのであります。

そのようにして、イエス様は僅か数年の公生涯、伝道活動の後、捕らえられて、今日見ますように、十字架に処刑されるわけでありまして。これは結局ポンテオ・ピラトというローマから派遣された総督によって為されたわけでありましてけれども、ローマ人が十字架に架けられるということはなかったわけでありまして。これは政治犯とか奴隷とかを処罰する非常に厳しい死刑の方法が十字架刑であったのでありますけれども、イエス様は十字架に架けられたわけでありまして。

そして私たちは先日来、イエス様が十字架上で発せられた七つのお言葉を順次見ておまして、今日のこの母マリアと弟子におっしゃった言葉が、これが第三番目の言葉とされているものであります。今日読まれた最後のところの25節以下にはこうあります。「イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロバの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、『婦人よ、御覧なさい。あなたの子です』と言われた。それから弟子に言われた。『見なさい。あなたの母です。』そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。」

十字架に架けられた者は、どういう経過で死に至るのか。ということを経験的に研究している人があって、インターネットで図面入りで説明しております。結局、窒息死するのです。十字架に架けられるわけですから呼吸するためには横隔膜を動かす。動かす力がなくなって、窒息して亡くなると説明されておりました。分かりますね。

こういうところから推測して、叫び声はわりに遠くまで届きます。しかし、このように、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です。」「見なさい。あなたの母です。」こういう言葉は叫んでいる言葉ではないのです。そばに居る人に言う最後に自分の母マリアを託する言葉を語っておられますので、これは叫び声ではありません。

それでわたしは今回この箇所を読むに当たって他の共観福音書、マタイ、マルコ、ルカによる福音書の同じ場面のところを読み比べてみまして、発見したことがあるのです。マタイ、マルコ、ルカとも最後まで十字架のイエス様を見守っている弟子たち、そしてそれは主として婦人の弟子たちなのですからけれども、マタイ、マルコ、ルカとも、そこには「母マリア」という言葉は出てこないのです。そしてマタイ、マルコ、ルカ福音書では皆、「遠くから見守っていた」となっているのです。ところが、このヨハネによる福音書だけが、今見ましたように、「イエスの十字架のそばには、」こういうふうにあります。

他は、今申しますように、「大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。」「ガリラヤから従って来た婦人たちは遠くに立ってこれらのことを見ていた。」これが、マタイ、マルコ、ル

力の書き方なのです。そしてそこには、「その母マリア」という名前が出ていないのです。それで、“これは？”と思ったわけです。四つの福音書があるわけです。そしてそれぞれが互いに、イエス様はこういうふうにおっしゃった。こういうふうに息を引き取られたと書いているのですけれども、マタイとマルコは同じですが、ルカとヨハネは全く違うイエス様の言葉を私たちに伝えていてくれます。これはどんな出来事でもそうなんですけれども、一人でその出来事のすべてを見渡すことのできる者は、それこそ神様のほかにはありません。人間が見るのはどんなにがんばっても、やはり一面というか、片面、部分です。

そしてヨハネによる福音書が最後に書かれた福音書です。紀元百年頃ということで、古いのはマルコ福音書で紀元60年代。その次にマタイとカルカが十数年そこそこ遅れて書かれ、更に二十年ほど遅れて紀元百年頃にヨハネ福音書が書かれたのであります。

そしてヨハネによる福音書は、何か哲学的というか、抽象的というか、少し理屈っぽい印象があります。しかし決してそういうことはないということは、今日の箇所を読んででも分かると思います。

イエス様の十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロバの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、この弟子にお母さんのことを託されたわけでありました。

この愛する弟子というのは誰のことか。これは、そこに「その母と母の姉妹」とありますので、マリアさんの姉妹がそばにいたということになります。そしてこれは他の福音書を読み比べますと、ゼベダイの妻ということで、その名前はサロメであります。そしてこのサロメの子として二人の息子がいるわけです。ヤコブとヨハネであります。ペトロに次いでイエス様の弟子になった二人がおりますけれども、その一人ヨハネであろうと言われます。ということはどういうことかと言うと、お母さんの姉妹の息子ですから、イエス様の従兄ということになるわけです。それで十字架のそばには母マリアさんがおられて、その姉妹サロメさんがいて、そしてその息子のヨハネがいて、両脇からマリアさんを支えていたということになるのでしょうか。そして弟子でもあり、従兄でもあるヨハネに、自分の亡きあとのお母さんを託されたということでもあります。

先ほど申しましたイエス様は、「わたしに従おうと思う者は、自分の十字架を負うて従って来なさい。」「わたしよりも自分の父母を愛する者は、わたしに相応しくない」と、こういうふうにおっしゃいました。

この「従う」という字は、「同じ+道」という、そういう言葉です。「同じ道に行く。」「運命を共にする」というふうの意味が深まっていきます。イエス様に従うということは、イエス様と同じ道に行くことなのです。イエス様と運命を共にすることなのです。

それで、父母を愛することと、兄弟を愛することと、イエス様に従い、父なる神の御心に従って歩むことが一致しているときはいいわけですが、しばしば私たちはあれかこれかを迫られるときを人生の大事な時に遭遇します。

会堂の三階の丸窓には、アブラハムが、「独り子イサクを献げなさい」と神から求められたその時の、「ヤハウエ・イルエ」という言葉が刻まれておりますけれども、やはりそのような神からのチャレンジを受ける時があるわけなのです。

イエス様は30歳にして伝道に立たれたわけですが、そのように神に従うことが親

孝行でもあるのだということをおもうのです。わたしも長男でありましたけれども、21歳で家を出て大阪を離れました。いざという時には傍にいなければ家族を助けることはできません。イエス様も託そうと思えば、本当に傍にいるその人にしか託せないのです。

そういうことですので、わたしは最近、「臨場感」というのは大事なことだと思うのです。今日の説教も後日プリントで読むことができます。けれども相当変わるんですね。プリントは読みものですから、かなりの手直しをします。今は此処で一つの説教を聴いているわけですが、其処に居合わせるか、居合わせないかということでは相当な違いを生むということになると思います。本当に傍にいた弟子でもあり、従兄でもあるヨハネに、マリアさんを託されたわけであります。

そのようなことで、イエス様は本当に父なる神の御旨に従われました。そして外見的には家族から離れられましたが、その道は、神の御心を第一に、中心に据えて歩むことがすべてにとって善きことなのだとおもうことを、身をもってお示しになったということが出来ると思います。

それで今申しましたように、ヨハネ福音書は、十字架の傍の「母マリア」という名前を書いています。“その時、マリアさんはどこにいたのだろうか”と、他の福音書にその名のないことに気付いて、ヨハネは思い巡らしたと思うのです。皆遠くから見ていて、お母さんはどこにいたのか。お母さんは十字架のそばにおられたのだと。そうでなかったら、イエス様の今日のお言葉は、私たちは聞くことがなかったかもしれないと思います。

そういうことで、ここから展開して飛躍して申したいと思うことは、先ほど申しましたように、一人の人間がすべてのことをわきまえ理解することは、これはあり得ないことであります。私たちの教会の場合でも数十人の者が礼拝を守っているわけですが、一人一人に与えられた賜物、そして人生の長さ、これは皆違うわけです。しかし人間は皆それぞれの存在意味がある。ヨハネによる福音書はヨハネによる福音書でなければ私たちが聞くことのできないものを彼は伝えている。マルコはマルコのように、マタイはマタイのように、ルカはルカのように、ということであります。

ここから更に飛躍しますが、このようにイエス様は十字架上での苦しい息の中から、母に、また弟子に語られました。その時、マリアさんはどういう応答をされたのだろうか。

わが息子イエスは十字架上で苦しんでおり、その中から自分のことを思い遣って、自分のことを弟子ヨハネに託すといった、最後の孝行と言ったらいいものを見せておられるわけですが、それに対してマリアさんはどういう反応をしたか。「そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った」と書いています。だから、マリアさんは引き取られたわけですが、それは後の事であって、この場でマリアさんはどういう反応をされたか。少し想像を逞しくすると、「すべてを神様の御手にお委ねして、」とそういうふうにはマリアさんはイエス様に言われたのではないのでしょうか。と申しますのは、イエス様の十字架上の最後の言葉は、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」です。それがルカによる福音書が記すイエス様の最後の言葉です。

「父よ、わが霊を御手にゆだねます。」実はこの祈りをイエス様に教えた人は誰かと言えば、お母さんのマリアさんなのです。これは何も珍しいことではなくて、イスラエルでは、「主よ、わが霊を御手にゆだねます」というのが、母親が子供に教える最初の御祈りなの

です。だからイスラエルの子供たちはその祈りを覚えて、日毎、夜毎、「主よ、わが霊を御手にゆだねます」というお祈りをもって歩み出し、眠りにつくのです。それがイスラエル人の生活習慣であったわけです。この祈りをイエス様に教えた人は他の誰でもなく母マリア、その人なのです。

聖書に書かれていない事をむやみに膨らませるのは厳に慎まねばなりません。こういう本当に身についたことが土壇場でも力を発揮すると思います。ですからマリアさんは声を出して言われたかどうか分かりませんが、「すべてを神様にお委ねして、」そういう思いの視線をイエス様に向けられた。それでイエス様は「父よ、わが霊を御手にゆだねます」というお祈りをなさって息を引き取られた。この祈りは就寝時のお祈りです。

そういうことで、このヨハネによる福音書は他の福音書が書いてないイエス様の言葉を私たちに伝えていてくれる。そこがイエス様のある特徴的な一面が浮かび上がって来るということで、四つの福音書がそれぞれ、それぞれなりにイエス様の証人として証をしている。こう言えると思うのです。

これは私たちの場合もそうです。一人一人がやはり他の人では代わりがきかない信仰と賜物を与えられて、生きているわけですから、無理することはないと思うのです。自分は自分のように歩むことに意味があるのです。

ところで、ユダヤ人たちから抗議が出ました。罪状書はある意味では世界を代表する三つの言葉で書かれました。ヘブライ語とラテン語とギリシャ語で、「ユダヤ人の王」と書かれました。これに対して、ユダヤ人の祭司長たちから総督ピラトに、「『ユダヤ人の王』と書かないで、『ユダヤ人の王と自称した』と書き直してください」と、抗議がでます。しかしピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と、声を荒げて応えました。どうしてかと言いますと、イエス様は捕らえられてユダヤの総督ポンテオ・ピラトの前に引き出されて、裁きを受けるわけですがけれども、ピラトはどう見ても、イエス様が死刑に当たるような罪人だとは思えないわけです。

ですから 18 章の 38 節に、「わたしはあの男に何の罪も見いだせない」とあり、また 19 章の 4 節にも、「ピラトはまた出て来て、言った。『見よ、あの男をあなたたちのところへ引き出そう。そうすれば、わたしが彼に何の罪も見いだせないわけが分かるだろう』」とあり、また下段の 6 節でも、「祭司長たちや下役たちは、イエスを見ると、『十字架につける。十字架につける』と叫んだ。ピラトは言った。『あなたがたが引き取って、十字架につけるがよい。わたしはこの男に罪を見いだせない』」と、このようにピラトは主イエスの無罪を三度も明言しております。それならば無罪放免なんですけれども、ピラトはイエスを死刑にする権限を持っていて、結局、主イエスを十字架に引き渡したのです。

ユダヤ人の大祭司たちが主イエスを十字架に追いやったのは、イエスに対するねたみだと。ねたみ以外の何物でもないということは、もう見え見えなわけです。ですからピラトは何とかしてイエスを助けたいと思うわけですし、またピラトの妻もこのことの少し前に、夢を見て、「あの正しい人に関わらないでください」と、こういうふうに夫ピラトに頼んでいます。そういうことも書かれているわけですね。ピラトはこの件から手を引こうと思うのですがけれども、ユダヤ人たちが許しません。この男を生かしていたら、自分たちの立場がなくなるという思いで迫っています。そして遂には、「私たちにはカイザルのほかに王

はありません」と、ユダヤ人なら口先でもこんなことは言わないはずです。王というのは、神以外にないというのがユダヤ人の信念なんでから。けれども今はこのイエスを亡き者にすればいいというただそれだけですから、「カイザル以外に王はありません」と言って詰め寄るものですから、これをほっておいたら暴動になってしまい、それこそ自分の責任が問われかねないというので、罪がない主イエスを十字架に引き渡すわけです。

そういうことが前段にあって、この罪状書に三つの言葉で、「ユダヤ人の王」と書いたわけですね。ところが今見ましたように、「ユダヤ人の王と自称した」と書き換えてくれと要求します。我々にとって王は神様しかないのに、イエスは自分が王だなどと自称して、神を冒涇したということなのです。この男が我々の王であるはずはないということですが、ピラトは、「わたしが書いたものは書いたままにしておけ」と、一喝してそれを退けたわけですね。

ある注解書を見ていましたら、ピラトはここで男らしく威厳をもって、「わたしが書いたものは書いたままにしておけ」と言っているけれども、彼は小さいところで威厳を発揮して、肝心かなめのところでは妥協してしまっていると。私たちの人生でも、どちらでもよいことに必死になり、大事なこと、肝心なことに真剣に関わらないということがしばしばあります。正にピラトはそのよい例ですね、というふうなことを書いていました。

これもまたヨハネ福音書にしかないのですけれども、ピラトが主イエスに、「本当にお前は王なのか」と尋ねるところがあります。それに対し主イエスはこういうふうに答えておられるところがあります。18章35節です。「『わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。』イエスはお答えになった。『わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことであろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。』そこでピラトが、『それでは、やはり王なのか』と言うと、イエスはお答えになった。『わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。』ピラトは言った。『真理とは何か。』」

そしてその後、ピラトは、「この人には罪はない。」「何の罪も見いだせない」と三度も言っているのです。ですからピラトもイエス様との対面の中で、あの人はただ者ではないということを感じて、「わたしは、あなたがたが引き渡したこの人が、自分が王だと自称し、人を扇動するとかしないとか、そんなことはあなたがたの目で確かめたら分かるでしょう。わたしはこの人に何の罪も見いだせない」と繰り返し言っているのですけれども、結局ピラトはユダヤ人たちの脅しに負けて、イエス様を十字架に引き渡すのです。

それで先程も申しましたように、どちらでもよいことに一生懸命に威厳を発揮して、大事などころで腰くだけになった。それでは後の祭りなのですが、今日、わたし達が見るところでは、そういうピラトの姿なんですね。

けれどもわたしはかねてから一つの疑問がありました。自分たちの指導者イエス様がエルサレムの郊外で十字架に架けられて死刑になられたわけですね。ところが、そのエルサレムでキリストの教会が誕生したわけですね。これにはちょっと飛躍があるのではないかな。そういうふうにかねて思っていました。弟子たちは一旦散り散りになって故郷に帰ったりし

ましたが、また引き返して来て、エルサレムにキリストの教会が最初にできるわけですね。しかしここには何か抜けていることがあるのではないかというのが、かねての疑問です。

しかしわたしは今日この箇所を読んでいて、ピラトは償いをしたのではないかと思いました。このイエスなる人物には罪はないということを認めていながら、結局死刑にするという腰砕けをやってしまった。そしてそのあと、弟子たちも一旦逃げていましたけれども、戻って来て、甦られた主を中心に教会が出来て行くわけですが、教会は依然としてユダヤ教に取り巻かれた環境の中にいたわけですね。ところが使徒言行録を見ますと、ペトロとヨハネがエルサレムの神殿にお祈りに詣でる姿が書かれています。教会誕生の根底に復活信仰があるというのが根本でしょうけれども、わたしはポンテオ・ピラトが自分の犯した過ちの償いを、総督という地位を利用して弟子たちを法的に守る仕方であるの仕方で償いをしたのではないか。そんなふうにしたのです。人間は過ちを犯すわけです。腰砕けになって、だらしのないことをしてしまうわけですが、償いのチャンスはないのかと言ったら、償いのチャンスはあるのです。

繰り返し引用しますが、バルトという人は、「この世の権力は、時に横暴になり、全く非人間的なことをやってのける。しかし、この世の権力に結局何ができるのか。勿論、死刑を課すこともできるが、結局、神の御心が地に成ることに仕える以外のことは、悪しき権力といえども、それ以外のことはできない」と。こういう聖書の箇所を読みながら、バルトという神学者は言うわけです。結局、神の計画を無にし得るようなものは、この世にはないのです。

『「彼らはわたしの服を分け合い、わたしの衣服のことでくじを引いた」という聖書の言葉が実現するためであった。』これは詩編 22 篇 19 節からの引用なんですね。詩篇 22 篇の冒頭の一句はこうです。「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか。」そして 19 節にある言葉が今日の箇所の下段の真ん中に引用されているわけです。聖書のそういうふうになっていることが、今こういう形で実現していると。そして実現することにピラトは腰砕けで仕えたのだと。ちょっとひねくれた受け止め方と言えそうですが、もう一面、ピラトは、「わたしの書いたのはそのままにしておけ」と言って、彼らの抗議を退けました。何と書いたかという、ヘブライ語とラテン語とギリシャ語で、「ユダヤ人の王」と書いたのです。この三つの言葉で書けば、当時の誰にも分かるということです。そして実はここにピラトの貢献がある。ピラトはイエスという人格に直に触れました。そして、この人物にギリシャ的な造形、思想の美を見出した。そしてローマに（ラテン語はローマの言葉ですが、）法と政治の理想を見出し、ローマということになるのですけれども、その神の法と神の国をイエス様の中に見出した。そして、ヘブライ語によって象徴されるのは、これは真の宗教と神礼拝です。ピラトが罪状書に三つの言語で、「ユダヤ人の王」と書いた中に、彼がイエス様に感じたものを書いたのではないか。ですから彼は抗議を受けても、「自称したのではない」のだ。「ユダヤ人の王なのだ」と。ギリシャ人にとっても、ローマ人にとっても、ヘブライ人にとっても、この男が王なのだ、直観したことを、腰砕けの中で掲げた。これはピラトの貢献と言えるのではないかと書いてある本もありましたけれど、そうも言えると思います。

以上、今日はイエス様の十字架上の第三の言葉をご一緒に見てまいりましたけれども、

聖書が私たちに伝えようとしてくれていることは、読み切れない思いがいたします。がしかし、今日の大きな流れからすると、ユダヤ人たちがイエス様を十字架に追いやったのはねたみ以外の何物でもありません。そしてピラトが妥協したのは自己保身以外の何ものでもありません。これが私たちの日常と言えば日常なんです。けれども冒頭に申したように、イエス様はおっしゃいました。

「わたしよりも自分の父、母を愛する者は、わたしにふさわしくない。」

「自分の十字架を追うて、わたしに従って来なさい。」

「自分の命を得ようと思う者はそれを失う。」

しかし、わたしのため、福音のために命を失う者は、それを得る。」

「たとい人が全世界を儲けても、自分の命を損したら、

何をもってその命を買い戻すことができようか。」

このようにイエス様は、十字架での死を予告された時に言っておられます。これは本当に真実な、そして私たちがここ一番の決断を求められる時に、肝に銘じないといけない真実な言葉だと思えます。それでも私達は妥協したり、自己保身を図ったりします。けれども、主イエスの十字架の執り成しのなかにそのような私たち一人一人が位置づいている。

これはヨハネによる福音書だけにある言葉ですけれども、17章の3節に、「永遠の命とは、唯一の真の神にいますあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」とあります。ですから今日の箇所のもう一人の主人公と言っていいピラトも、この永遠の命に触れているのではないかと思います。

「永遠の命とは、唯一のまことの神にいますあなたと、

あなたがお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」

この言葉を彼は聞いていなかったと思いますけれども、イエス様と本当にぎりぎりのところで直接に触れて、本当にギリシャ的にも、ローマ的にも、ヘブライ的にも、やはり真理を証しする存在としてのイエス様に、彼も直に触れて、この永遠の命の裾にポンテオ・ピラトも触れたのではないかと。それゆえに彼は後に償いの業をしたのではないかと、あれこれ思いをいたしたところでもあります。

お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

私たちは浮き沈み、不安、動揺、揺れ動く者でありますけれども、あなたが揺れたまわらず、真実をもってその恵みの御計画を遂行なさってくださいますので、私たちはすべての罪、とが、苦しみ、恐れの中にあいつつも、あなたに思いを向けて、目を上げて、あなたの憐みにすがり得る信仰を与えられていることを、心から感謝いたします。

私たちも歩みの中で決断をしなければならない時がありますけれども、どうかそのような時に、あなたの御心のままに、御心に適う道を選び取ることができるように支え導いてください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前におささげいたします。アーメン